

協同的な活動の模索[†]

小林 功*・高柳 恭子**・岩淵千鶴子**・五十嵐市郎**
原 由美**・前原 由紀**・稲川 知美**・星野さやか**
宇都宮大学教育学部*
宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

幼児は本来好奇心を持って、環境に主体的にかかわる力をもっている。とりわけ5歳児における追求していく力には偉大なエネルギーを感じる。また、5歳児になると、友達との関係がより太いパイプで結びつき、やりとりをしながら遊びを創造していき自分の思いや追求をより深いものにしていくことができるようになる。しかし、近年では、思いがもてない、人とのかわりがうすいという子ども達の姿を目にすることが多くなってきた。この現状をふまえ、目の前の子ども達の姿をもう一度見つめ直し、もっと積極的に一人一人の自発性を起こすような教師の投げかけやそれぞれの学びが響き合うような協同的な学びの場を保育の中で丁寧に考えていかなければならない。そこで、5歳児の生活が充実し子供たちの世界がより豊かになるための協同的な学びに向かうひとつの方法として、テーマをもった保育を視点として「協同的な活動」を生み出すための保育のあり方について模索したい。

キーワード： 協同性な学び 協同的な活動 テーマ 追求 就学前教育

1. テーマをもった保育とは 協同的な活動を生み出すために

5歳児の保育にとって協同的な活動は大きな意味を持つ。幼児の自然な遊びの中にも協同的な活動は生まれている。しかし、子供同士のかかわり合いが希薄になった今、教師が意図的にそのような場面を作り出していくことも時には必要である。これまでも私達は5歳児の遊びがより豊かになるために教師があるテーマをもっ

て保育の中に新たな刺激となる投げ石をしたり、より一人一人の追求が深まるような投げかけをしてきた。そのことが波紋となって協同的な活動が生まれ互いの学びが響き合うことができた。ここでは、改めて5歳児にとって協同的な活動を生み出すためにはどんなテーマが必要なのか、どのような投げかけ方をしたら幼児の学びが響き合うのか丁寧にとらえ直していくことで5歳児の保育を豊かにできると考えた。
ここでいうテーマとは

テーマというと様々な意味を包括しているように思われるが、ここでは個々の遊びのテーマではなく、保育を組み立てていく時にひとりひとりが主体的な自分の学びを追求しながら一方では回りの友達を感じ、互いの学びが響き合

[†] Isao KOBAYASHI*, Yasuko TAKAYANAGI**,
Chiduko IWABUCHI**, Ichiro IGARASHI**,
Yumi HARA**, Yuki MAEHARA**,
Tomomi INAGAWA**, and Sayaka HOSHINO**

* Faculty of Education, Utsunomiya University
** An Attached Kindergarten, Faculty of Education,
Utsunomiya University

いながら学びをさらに深めていけるようにするために教師がもつテーマである。

例えば教師が「動かして遊ぶ」ということをテーマとして持つ。そのことで生まれる子供の活動としては滑車を使って持ち上げるエレベーターごっこであったり、丸太のようなローラーの上を転がっていくジェットコースターのようなものを作ることだったり、たらいを回してメリーゴーランドを作ったりと様々である。ある大きなテーマがあることで子供たちは個々に自分の思いを実現させることに向かっていくとともに隣でやっていることに目を向けることで友達の使っているものに興味を持ったり、友達のやっている方法を知ったりして自分の活動に取り込んだり、新たな活動のきっかけになったりすることもある。

これは一つの方法であり、個々の遊びを包括するような大きなテーマであることもある。また、集団にあるテーマを投げかけ、そこから一人一人のやりたいことが見つかっていくこともある。あるテーマを投げかけるということは課題をもつとも言うだろうかと考えたが、ここでは、あえてテーマと言う言葉を使っていきたいと思う育ちの中で必要な時期に必要な質のテーマをもった活動を取り入れることが協同的な活動を成立させ、一人一人の学びの質を高めることになるのではないかと考えた。

2. 保育の実際

テーマをもつという視点で保育をもう一度見直してみたとき、そのテーマの質によって子供同士の学びの響き合い方が違ってくるように思う。自分と周囲との関係の持ち方など一人一人の育ちに伴って意味のあるテーマが変わってくる。そこで、次の4つの見方でこれらを整理し幼児の実態と照らし合わせて協同的な活動を通した幼児の学びについて探っていきたい。

○多様なイメージが広がるテーマがあることで

○多様なかわりのできる「もの」を通して

○個々の追求が周りに関係づいていくテーマをもつことで

○テーマから自分の目的が見つかって

多様なイメージが広がるテーマがあることで

実践事例 おばけやしきごっこ (5歳児5月)
ドラム缶や功技台を並べた場で遊ぶ中でそこからおばけやしきをイメージし、「おばけやしきコース」をつくりたい」と教師に声をかけてきたひろし。今までひろしは友達とかかわりたいがために、相手を叩いてしまったり、場の雰囲気にもそぐわない態度をとってしまったりし、うまくかかわれないでいた。教師はひろしのアイデアが豊富な面や作ることが得意な面などのよさが伝わればと思い、おばけやしきコース作りと一緒に付き合ってみることにした。

(考 察)

ここでは、たくさんのおばけやしきごっこにかかわった。みんな口々に「おばけやしきをしている」と言っているが、イメージはバラバラで、おばけになりきって楽しんでいる子・おばけを様々な素材で作ることを楽しむ子・しかけに凝る子・チケットを作り配る子・おばけやしきに入りたくて待っている子など楽しみ方もそれぞれであった。

しかし「おばけやしき」という言葉のもつイメージの共有によって、なんとなく共通の話題になっていった。そのことで自分なりの方法でかかわろうとするなど、目的を持つきっかけになった子もいる。また、隣でしていることが気になり友達の存在に気づいたりもしていった。数週間後には、友達のしていることを真似てみたり、刺激を受けてさらに自分なりの新たな目的や楽しみを見出していったりする姿が見られている。

同じ時期「アスレチックごっこ」が広がりかけたが、なかなか遊びが続いていかなかった。これは「アスレチック」というものが一人一人がそれぞれにイメージをわかせるのが、ルールが共通にならないと遊びが進みにくい、多様な方法でかかわりにくいことなどが原因だったように思う。また、この時期はイメージやルールを共通にしていくのは難しい時期なのだろう。そういう意味では「おぼけやしきごっこ」という遊びは子供達の様々なイメージを包容し、それぞれの思いにむかって様々な楽しみ方、かかわり方ができたから広がっていったのであろう。**多様なかかわりのできる「もの」を通して**

このような子供同士の接点はイメージが共有できるテーマだけから生まれる訳ではない。共通な「もの」を投げかけることで様々な活動が生まれていく。様々な活動が生まれるということはそこに子供同士のかかわりも生まれていく。ここでは、くぎとかなづちといった「もの」を接点として一人一人の遊びが深まっていった事例を紹介したい。

実践事例

くぎとかなづちを提案して（5歳児6月）

6月に後半になって、教師は「楽しみ方は個々にバラバラであるが、自分のイメージを友達に伝えたいと思っているようだ。何かイメージが大まかに共通になり、友達にイメージが伝わる喜びを味わうきっかけになるような活動を保育の中にとりいれていきたい。また、新しい刺激を欲している子もいる。」と考え、くぎとかなづちという新たな素材を子ども達に投げかけてみた。くぎとかなづちは、この時期の子ども達が興味をもってかかわるものであり、子ども達の様々なイメージや楽しみ方を包括してくれる素材であると憶測した。また、その後の子ども達の遊びが広がり、生活が豊かになっていくことも期待できるような気がした。

（ 考 察 ）

くぎとかなづちという同じ「もの」を使っている活動そのものはまったく別のことをしている。それぞれの子がそれぞれの方法でやりたいことをやりたいようにやっている。くぎとかなづちという「もの」を使ってひたすら打つと言う行為そのものを楽しむこともできる。また、打ちながらイメージをわかせることもあるだろう。自分なりに作りたいものを作り始めたり、その中で作りながら新たなイメージがわいて新たな目的が生まれたりすることもある。何人かで自分たちの目的をもって作ることもできる。

しかし、くぎとかなづちという「もの」が共通だったことで、それぞれの活動をしながらもそこに協同的な活動が生まれている。側にいる友だちのしていることや工夫しているところに気づき、自分たちのやり方に変化が見られた子もいる。また、友達の器用さや新しいやり方など今まで知らなかったところに気付いている。それは同じ活動をしている子供同士に限らず、全く別の場所で別の活動をしている子供同士でも、くぎとかなづちを使っていることが話題となって、それぞれの活動を知ったり、新たなおもしろさを発見したりもしている。

～その後の生活～ <二つの事例から>

○ 新たに自分の居場所が見つかった

課題を投げかけたことによって、これまでこだわってきたものから少し目先が変わり新たな目的が見つかったといったので、これまでとは異なる場所で新たな追求をしている姿が多く見られた。

○ クラスのことに関心をもつようになって

クラスの子たちと共通の話題で話したり、かかわりをもったりしたことによって、友達の中にいる、友達にかかわっていくことが楽しいことであると感じ、自ら集団にかかわっていくことに関心をもったようである。以前より、クラ

スで困っていることや今流行していることなどに敏感になり、直接かかわらなくとも関心をもって様子を感じられた。

テーマがあることで生まれる協同性の育ち

- ゆるやかに遊びや場が共有できるような遊びやテーマを投げかけることによって、それぞれ自分の遊びに向かいながらも、ある遊びに自分のしていることが位置づいていくことによって、自分の居場所が見つかったり、新たな目的が見つかったりする。
- 自分のやりたいことにむかいながらも、遊びや場をゆるやかに共有することによって、友達の良さに気づいて真似ようとしたり、自分の遊びのヒントにしようとしたりする。
- クラスで共通の話題について話すことにより自分なりに集団にかかわり、その中で自分の存在感を感じる。

個々の追求が周囲と関係づいていくことで

- ① 自分が変わるきっかけになって(運動会をきっかけに)

本園の運動会は例年、恒例の人気種目とその時期子どもたちが遊んでいた遊びを運動会向けに演出したものとで構成されている。年長児はかけっこをしたり、普段のごっこ(例えば忍者ごっこ、宇宙ごっこ、海賊ごっこなど)を障害として組み込んだリレーをしたり、今まで遊んできた素材を使って看板・入退場門作りをしたり、自分たちで見つけた動きをリズムとして楽しんだりし、自然な流れの中で運動会に向かっていく。しかし、それは子供たちにすべてをまかせるということではない。それまでに子供が自発的に行っていた遊びを運動会という課題に子供

たちと一緒に位置付けていくのである。

ここでは、そのことでクラスに目が向き、自分のやりたい遊びを通して友達とのかかわりを持ちながら自分が変わっていったじゅりあの遊びを追って協同的な学びについて考えていきたい。

実践事例 運動会 (5歳児6~10月)

5歳児を担任して4月の時点から、担任は一人一人の遊びを充実させていくこととともに“みんなと一緒に”の楽しい時間も1日または週の中で意識して保育を組み立てていた。それは、お片づけやお弁当の前のほんのひととき、みんなでゲームをすとか、帰りの時にみんなで声を合わせて歌を歌うとか始めはそんなことだった。5月頃になると「今日はどろけいしよう。」「今日はサッカーやろう。」と食後はみんなで一緒に遊びをしようという時間も週に2日位から取り入れて“みんなと一緒に楽しい”という思いをもてたり、一人一人の新たな面に気づいたりする場になるように思っていた。

いつも一人で自分の思いの追及をすることを楽しんでいるしょうじにとってもクラススの友達を知るきっかけになってほしいという思いもあり、一緒に遊ぼうと誘ってみたいしていたが、5,6月の時点では「ぼくは行かない。」と自分以外のみんなと一緒に遊んでいても一人で遊ぶことがほとんどだった。

エピソード1 (6月頃)

クラスで忍者ごっこが流行している。子供たちは気の合う仲間同士でイメージをやりとりしながら固定遊具を見立てそこにロープをかけたり、穴をほってはしごをかけたりして遊んでいる。一方しょうじは忍者にはなっているもののひとりで身につけるものを作ったりわなをしかけたりして楽しんでいる。時々、忍者ごっこをしているクラスの友達に視線はむけるが、そのままひとりで黙々と遊び続ける。

担任の思い

クラスの友達としょうじが同じ遊びをしていることをチャンスととらえ何とかしょうじのアイデアに他の子たちが魅力を感じてはくれないかと思い、教師がしょうじの遊びにつき合いながら魅力を伝えようとしたが、しょうじのアイデアが他の子の忍者ごっこの中にとりいれられていくようなことはなかった。しかし、互いに何らかの刺激になることを期待しながら、互いの遊びが見えたり感じられたりするように場の設定などを工夫するように心がけた。

エピソード2 (9月)

クラスで忍者のリレーごっこをしているすぐ横でしょうじがタイヤをならべて忍者のしかけをつくっている。しょうじは一通り忍者のしかけをつくりおわると、遊具の上のってリレーごっこの様子を笑いながら見ている。「やる？」と声をかけたが「見てる」という答えがかえってきたので、「このしかけ使ってもいい？」ときくと「いいよ。ぼくがやり方を説明する」という。そこでリレーごっこをしている子供たちを集め、しょうじに説明してもらった。再びじゅりやのしかけが取り込まれたリレーごっこが始まった。しょうじはその様子を満足そうな表情で遊具の上から眺めていた。

担任の思い

みんなの様子を見てしょうじが笑ったとき、しょうじのクラスの子に対するとらえ方がこれまでとは変化してきているように思えた。これまで、どこかおどおどして、クラスの子にかかわることに自信がなく、恐怖心さえ感じているのではないかと思うほどだった。しかし、このときは本当に構えがなく心から友達のことをしていることがおもしろいと感じているようだった。何とかかかわってほしいという思いから

「やる？」という言葉をかけてしまったが、それはまだ早すぎたと反省した。しょうじのしていることが認められていくことでしょうじの中に自分はリレーごっこにかかわっているという意識がもてたらいいなあと思った。

エピソード3 (9月)

しょうじは登園するとまず忍者のグッズを身につける。それから園庭にでて、白線をひいたりタイヤをならべたりしてリレーのコースをつくっている。そして作りおわると遊具の上のってみんなが来るのを待っているが、しょうじは見ているだけで走ることはしない。しかし、その日はたくとに「人数たりないからやらないか？」と誘われてしまった。しょうじがどう答えたらいいのか迷っているようだったので「やり方わかってる人の方がみんなも助かるみたいよ」と声をかけてみた。すると「やる」とこたえ、チームの一員にくわわった。しょうじはすでにルールをすべて把握しており、生き生きとした表情でリレーごっこをしていた。

担任の思い

ここのところしょうじがずっとリレーごっこの仲間に入るきっかけを探しているように見えたので、思い切ってしょうじの背中を押してみたのだが、「やる」というこたえがかえってくる自信はなかった。やはり教師ではなく友達に誘われたということが大きく影響したのであろう。友達に誘われたことでしょうじの中に友達に受け入れられた喜びや自分に対する自信が芽生えたのではないかと思う。この日はしょうじがはじめて友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わった日だった。

(考 察)

自分の興味のある遊びに没頭し、周りの状況

など目に入っていないように見えたしょうじ。忍者の仕掛けを作るという自分が本当にやりたいことに、とことんこだわっていたことを教師が理解していた。運動会という大きな課題に取り入れている。そのことで、しょうじは友達の中で遊ぶということを経験している。はじめから「障害走をやろう。」ではおそらく友達の中には入っていけなかつただろう。自分なりの形でそこに参加できたことが重要である。仕掛けを作るというしょうじのアイデアが認められることによってみんなの中の自分を感じ、友達の意見に耳を傾けたり、一緒にルールを考えたり、一人で試行錯誤していたときは違った質の学びをしている。この後、しょうじは自分のやりたいことをやりたいようにやりながらも、周りの友達を意識している様子が見られるようになった。それぞれの遊びが一つの課題に位置づいていくと言うことはそれぞれの主体的な学びをもとに協同的な学びが深まっていくことになるのだ。

～その後の生活～

○ 子供たちの視野が広がって

自分のしてきたことが「運動会」という園の行事に位置付いたことで、視野が広がり、年少中組に教えに行くなど、自分の活躍できる場が広がった。

○ 友達の思いをきこうとして

友達の思いに耳を傾け、自分の思いとすりあわせ遊びを進めていくことによって、自分の思いだけでは実現しないような楽しいことが実現する喜びを味わったので、5、6人の仲間同士で思いを伝え合いながら遊びを進めていこうとする姿が見られるようになった。

○ これまでの友達関係が広がって

「運動会」という大きな共通の目的があることで、クラスの子供たちの意識が集中

したため、これまでに気づけなかつた友達のよさや得意なことを知った。ほとんど交流のなかつた新たな仲間と遊んでいたり、ひとりで遊んでいた子がルールのある遊びに交ざったりする姿が見られるようになった。

テーマがあることで生まれる協同性の育ち



- 自分のしていることが全体に位置づく（意味が生じる）ことではりきる。
- 課題に意識が集中することで今まで知らなかつた友達のはりきりに気づいたり、認めたりする。また友達に認められることではりきる。
- 今までとは違った自分に気づいたり、新たな人間関係を築いたりする。

② それぞれの遊びが位置づくテーマがあることで

実践事例 「ほしつきまつり」

子供たちは5、6人の気の合う仲間同士で固まって、おのおのの遊びを楽しんでいる。具体的には、

- ・ 進級当初から年長組の前庭に池と川をつくっている。川づくりにこだわり長くしたり、橋をつくったり、飛び石をおいたりして楽しんでいる。
- ・ 気の合う仲間とルールを共通にし、ビー玉を使ったりボールを山から転がしたりしてゲームを楽しんでいる。
- ・ 友達とイメージのやりとりをしながら木片やその他の素材を組み合わせる様々なものをつくっている。
- ・ ホッピングや鉄棒で技に挑戦したり、ロープなどを使って自分の体の挑戦をしたりしている。

などの姿である。

教師は、これらの子供達のしている遊びを共に盛り上げてきた。そして盛りあがってきたところで「小さい組を招待しておまつりをしよう」と子供達に投げかけた。

エピソード1

自分の身の振りかたを変えていく

木片を使って飛行機や船などを作ってきたけんじ、あきお。ほしつきまつりでは年中少にむけておもちゃやさんを開き、自分たちの作った木片のおもちゃを売ることにした。けんじは「たくさんないとみんなにあげられないからもっと作るんだよ」と毎日少しずつ作り当日までに20個近くの戦闘機を作った。ほしつきまつり当日けんじは年中組の子に作品をあげていたが、どんどん商品が少なくなり、店の横で更に作り足しながら同時進行で店番をすることにした。けんじの様子を見た年中児が自分も作ろうと手を出したとき、あきおが「だめ！今作ってるから」と言うと、けんじはあきおに向かって「一緒に作ればいいじゃんか！」と言い、一緒に木片で工作するスペースをいすで作り始めた。

準備として、相手に喜ばれるものを作ろうと考えながら毎日活動し、この日も年少中組に喜んでもらおうという自分なりの目的があったことがこの姿となったのではないか。

エピソード2

自分の本当にやりたいことに向かえる

年中組のとき仲の良かった隣のクラスのゆきとのしがらみで、なかなか自分の遊びができなかったえつこ。ほしつきまつりに向けての活動では「紙芝居を作って年少中組に読み聞かせする」と決め、紙芝居の元となるお気に入りの絵本を家から持ってきた。ゆきはコリントゲームをつくりゲームランドとして遊んでもらうコーナーを作ろう

うとしていた。ゆきがえつこに「一緒にゲームつくるでしょ？」と誘いにきたとき、えつこは少しの間黙っていたが「いい。私紙芝居するの」とはっきり自分の思いを表し、それからほしつきまつりの前日まで紙芝居づくりに集中していた。

ほしつきまつりにむかう課題があったから本当にやりたいことが見つかったえつこ。もともと根気があり、やるべきことがあることではりきれるところがあったが、特にこの活動では、それまでとは違い、「ほしつきまつりがあるよ」という投げかけにより自分で活動を決めたため、完成に向かってはりきって生活することができた。

エピソード3

友達のがんばりを自分のことのように感じて

ホッピングに熱中していたあけみ。ほしつきまつりではサーカスショーをすることに決め、友達とわざを競い合いながら練習を続けている。同じサーカスショーをやる仲間の中では、どんなわざができるか提案したり、練習中の友達にコツを伝えるなどして、リーダーシップをとっている。巧技台を組んで作った階段を下りる練習をしていたさなえが初めて成功したとき、あけみは「先生見て見て！さなえちゃんができるようになった！！」と自分のことのように喜び、目を輝かせて報告にきた。

それまではさなえに対して強い口調で思いをぶつけ、トラブルの多かったあけみだが、本番に向けて一緒にショーを成功させようと活動していく中で仲間の意識が強まり、さなえの成功を自分のことのように喜べるようになった。

～ その後の生活 ～

○ 遊びをより深めていこうとする姿

気の合う仲間の中だけでやりとりが行われが

ちだったが、自分たちから声をかけたりアイデアを出してみたり、ききいれたりして、仲間同士が互いに刺激しあい交流するようになった。ひとつの遊びにかかわる人数も8人～10人と増えてきた。

○ 友達同士で関係性が変化して

気の合う仲間の中でも主張の強い子のいいなりになって、自分の思いをはっきり言えなかった子が、自信をもって主張するようになったり、主張の強かった子が友達の思いをきいて、自分の考えとすりあわせていこうとしたりするなどして、ひとつの遊びがやりとりをしながら進んでいくようになった。

テーマがあることで生まれる協同性の育ち

- 自分たちで友達と思いをやりとりしながら創ってきた遊びが課題に位置づくことで意味を帯び、さらに遊びをおもしろくしたり工夫したりしようとして新たな目的が見つかっていく。
- 課題に向かい、または課題を意識して活動が交流することで、友達のこれまでとは違った面が見えてきて関係性が変化する。
- 友達の新たなやり方、ものへのかかわり方を知ったりとりいれたりして、自分なりに新たなやり方、かかわり方を見出す。

テーマから自分の目的を見つけて

実践事例

「つきぐみのアンサンブルをしよう」

楽器を出して、子供たちを集め「つきぐみのアンサンブルをしよう」と提案をした。みんなで曲を決めたりグループ分けをしたり「音楽会」の日を決めたりして、それぞれが活動していった。以下はそのときの子供たちの姿である。

エピソード1

一人のアイデアを認め合いながら

グループの中でそれぞれの楽器が決まり、みんな音楽会にむけてアンサンブルを楽しむようになったある日のこと、これまでずっと小太鼓を楽しんでいたかずおが、急にみんなの前に立って指揮をはじめた。かずおは音楽にのって気持ちよさそうにタクトをとっている。他の子たちは一瞬びっくりしたようであったが、すぐにこにこしてかずおの指揮を見守っている。誰も何も言わず、気持ちよさそうにアンサンブルが続いていく。

かずおは音楽会にむかう中で、指揮者になると思いつき、実行してみたのであろう。このときのかずおは全身指揮者になりきっていた。そして、かずおの発想をクラスの子たちが受け入れ、認めていくので、かずおは一層はりきっていく。クラスの子たちも音楽会には指揮者が必要だと思ったのだろうか。課題からかずおは指揮者という楽しみを見つけだした。かずおという人物を皆が理解し、たくやの見つけた楽しみに乗って演奏することを心地よいと感じたのだろう。

エピソード2

自分なりにできることを見つけて

新入園児の一日入園の日、年長組では何かするかクラスで相談したところ、クラス全員で合奏することに決まった。1月に子どもたちはグループに分かれて合奏の練習をし、2週間前に「音楽発表会」をしたばかりで、自分たちの演奏を聞いてもらう気持ち良さを感じ経験をした子も多かった。

「音楽会に決まりだね!？」と全体に確認すると、たけるが「僕ポスター作る!先生大きい紙ちょうだい!」とすぐに言い、それを聞いた

子ども達は「私も!」「入れて!」「私たちは(保育室の)飾りつくる?」「うん、先生折り紙ちょうだい!」「先生チケット作ろうよ」「おい、なおとつ、けんじつ、練習しようぜ!先生、『これから音楽会が始まります』って言うの僕やる!!」と次々に言い出し、早速音楽会の準備が始まった。

一日入園で発表するという目的がはっきりしたとき、指揮をする子、あいさつをする子、ポスターを描く子など役割分担が即座に決まっていた。それぞれの子が自分の持ち味をよく知っており、どういうふうに分かかわったら音楽会が成功するかを感覚的にとらえられた役割分担であった。また、それぞれの行動は自分の思いだけで決められているのではなく、他の子の役割も視野に入れたり、一日入園の日まで見通しをもったりした上で、自分の行動を決めているように思えた。

エピソード3

園全体を見渡して活動の見通しを立てる

クラスで発表会をしていたえみたち。鍵盤ハーモニカ、タンバリン、鈴、鉄琴などそれぞれのやりたい楽器に取り組み、2~3曲できるようになっている。クラスだけではお客にも限りが出てきたのでえみの提案で各クラスを楽器を持って回るようになった。みんなで各クラスを回り担任の先生に来られる時間を聞き、4クラスの時間を調整していった。クラスだけでなく遊戯室や楽器を持って歩く廊下も個人で、またみんなで練習していった。年中組に入って演奏した時には自分たちで(鑑賞用の)椅子を並べたり、「静かに聴いてね」とか「〇〇という曲をやります」など演奏の環境を自分たちで整えていった。その後えみの「準備いーい?せーの」の合図で演奏が開始された。ひたっと息を合わせ2曲が終わると、大きく息を吐く子、

にこっと笑う子、あたりをうかがう子など反応は様々。そして拍手の中次のクラスへ移動していった。

子供達だけでアンサンブルを完成させるのは、一人ひとりが曲に合わせて楽器を演奏する楽しさを味わうと同時に、自分勝手に演奏するだけでなく、音のそろうおもしろさを感じたり、友達の音を聴いて自分のやり方を調整していくなど、みんながひとつの曲によって演奏することを楽しいと感じられることが必要である。これらのことは、友達とひとつのことを創りあげていく喜び、「演奏会をしよう!」というみんなのテーマから自分の楽しみを見出し追求していく力などが総合的に育っていないとできない。また、この子たちは園生活全体を見渡して、自分以外のクラスの担任の先生と連絡を取り合うなど、自分達で活躍する場を見出していった。この時期ならではの視野の広がりと共に、2年ないし3年暮らしてきた幼稚園だからこそではあるが、園生活全体を見通して自分達の行動を考えている姿と言えるだろう。

テーマがあることで生まれる協同性の育ち

- ・ クラスにおける様々なこと(課題や生活)を自分のこととして受け止め、自分の行動、身の振り方を考えていく。
- ・ 全体の課題を自分のこととしてとらえ、そこに自分なりの楽しみを見出したり役割を感じたりして、友達とひとつのものを創りあげていく。
- ・ あることに対して自分の立場を認識したり、友達の特徴、持ち味などを生かしたりしてより高いものを創造しようとする。
- ・ 園生活全体を視野に入れて、自分たちで活躍する場を求め、自分を充実させようとする。

(3) まとめ

テーマがあることで、5歳児の生活が豊かになるのではないかという仮説のもとに保育を展開してきたが、実際にたくさんの効果があったように思う。

それぞれ自分の遊びに没頭している子供達にテーマを投げかけると、個々の中で意識が広がる。すると、そこに個々の遊びの交流が起こり、それぞれの学び、つまり情報を仕入れるきっかけになる。事例では、テーマがあるから新たなやり方を見出したり新たな目的が見つかったりしている場面が多くとりあげられている。そして、またその情報をもって個々の遊びに没頭する。それは、前に没頭していた遊びとは質が違ったり、新しい経験であったりするであろう。これこそ、協同的な学びが主体的な学びをより高めているということになると間かえる。しかし、難しいのは、テーマを投げかけるタイミングである。常にまわりのことばかり気にとらわれていると、個々の没頭している遊びが深まらず追求が中途半端でおわってしまう。個々の追求を充分保障した上でテーマを投げかけるタイミングを考えていかなければならないだろう。

一方、集団にとっての効果はどうだろう。テーマがあると個々の意識はテーマにむかう。すると、自分以外の友達のしていることに目が向く。このとき、個々が課題に主体的にかかわっていることが前提である。そうでないと、友達らである。また、テーマにむかっていることで友達に気づきながら自分の居場所を求めたり、のしていることはただの人ごとで終わってしまい、その友達を心から認めることができないか友達に認められて自分の存在感を感じたりして、自分の存在感を感じたりして、自分充実させられる集団に育っていく。

事例から子ども達の発達に応じてテーマの大きさや中味が違っているのがわかる。しかし、共通していえることは、テーマがあることで子供達の活動に意味が生じてくることではないかと思う。意味が生じることによって、子ども達ひとりひとりが生き生きしてくる様子が記されている。ここにテーマを投げかける意味を大きく感じる。

5歳児前半では、多様なイメージが広がり、個々がそれぞれの思いでかかわれるようなテーマや、どのような活動でも包括できるような大きなテーマをなげかけ、子ども達の活動を位置付けていく。子ども達はそれぞれに個々の追求をしているが、互いの学びが響きあうように、位置付けながら意味づけているのは実は教師なのである。しかし、5歳児後半になると、子ども達は自分たちで自分たちの活動に意味を見いだせるようになる。投げかけられたテーマから自分の楽しみを見出していくことができるということである。このことは、小学校以上の学校教育における主体的な学びの姿を確保するためには大切な育ちなのではないかと思っている。

